

# 論新鶴西

大目之下イ田・織



織田作之助 著

西鶴新論

天地書房

西鶴新論

定價金六拾圓

著者

織田作之助

發行者

經路市上白銀町五〇番地  
高井時雄

印刷者

兵庫縣津名郡志鏡町二五八九ノ一  
株式會社 井村印刷所  
代表者 井村雅信

發行所

大阪市西區北堀江通一二丁目七番地  
天地書房

## は し が き

この「西鶴新論」は私が始めて試みた所謂書下し評論である。原稿用紙にして三百餘枚、病弱蒲柳の私が執拗な微熱と血痰に悩まされながら、また、屢々他の仕事によつて中断されながら、ともかく一氣呵成の筆を運ぶことが出来たのは、恐らく西鶴に對する私の愛情ゆゑであらう。そして、また西鶴についてさまざま行はれてゐる俗論に對する反撥心のせゐであらう。

或はこの評論は西鶴論に名を藉りた私自身の小説論になつてゐるかも知れないが、しかし、西鶴に對する二三の新しい發見はあらうと信じてゐる。その意味でこの書は西鶴未讀の人は勿論、専門家諸氏にも讀んでいただきたいと思つてゐる。

もつとも、西鶴に關する考證など私の柄でも、出る幕でもない。したりありげに考證めかしたのは、實は私の本意ではない。考證と見せかけて、例のことを言ひたかつたのである。

西鶴の人と藝術に於ける最も重要な性格、即ち彼の大阪的性格をひとはややもすれば忘れようとしてゐる。私のこの評論に些かでも新しいものがあるとすれば、この點を明らかにしたことではな

からうかと、私は已惚れてゐる。更に私は強引に西鶴とスタンダールの酷似をあげた。そして「何事も信じない人」とこの西鶴のもつてゐる強さ、その現代的意義を明らかにせんと努力した。また、西鶴が近松や芭蕉よりも健康な作家である所以も、説かうとした。この私の試みが従來の謬れる西鶴觀を、いくらかでも訂正し得たとすれば、幸甚である。

もとより、淺學の私のこと故、國文學の専門知識は乏しく、従つて諸家の説に頼るところが多かつた。屢々無禮な反駁をしてゐるが、反駁のための反駁よりも、話の順序として反駁した場合が多い。これも一種の西鶴的、俳諧的手法と思つて、御寛容ありたい。

昭和十七年 晩春

織田作之助

## 目次

|           |     |
|-----------|-----|
| 一 大阪の人    | 一   |
| 二 元祿町人    | 二七  |
| 三 大阪人的性格  | 三六  |
| 四 俳諧師     | 六六  |
| 五 浮世草子    | 九〇  |
| 六 町人物への過程 | 一二  |
| 七 町人物の教訓  | 一三五 |
| 八 晩年      | 一五〇 |
| 九 西鶴の文章   | 一七七 |
| 十 現代的悩義   | 一八六 |

## 一 大阪の人

西鶴は大阪の人である。

大阪に生れ、大阪で育ち、大阪で書き、大阪で死に、その墓も大阪にある。

東區上本町四丁目、すなはち市電の上本町五丁目の停留所を半丁北へ西側の誓願寺にあるのがそれだ。二三の書に上本町八丁目とあるのは誤り、昔はこの邊りを八丁目寺町といった故、恐らくそれと混同したのであらう。はじめは本堂の背壇南側の三列目中程に葬られたらしいが、その後久しく石垣に雜つて、寺の人でさへその墓主の何人であるかを知らなかつたのを、幸田露伴博士が參詣の折探し出し、木崎愛吉氏の寄進によつて、現在の位置、本堂の西南隅に移されたと言ふ。花崗岩中形の元祿式石碑のおもてに、大きく深く「仙皓西鶴」左側に稍小さく「元祿六年癸酉八月十日」右に「下山鶴平北條園水建」とある。西鶴の傳記は殆んど傳つてゐず、その經歷は曖昧、混沌としてゐるが、その中でこの歿年の日付だけは全體信するに足るやうだ。墓碑銘に刻まれてゐるばかりでなく、彼の遺著「西鶴置土産」の元祿六年版にも、このことは明瞭である。即ち、その卷頭には、

難波俳林

松壽軒

西鶴

辭世 人間五十年の究りそれさへ

我にあまりたるに

ましてや

浮世の月見過しにけり末二年

元祿六年八月十日五十二歳

と、肖像入りで辭世を掲げ、死歿の日付はむろん、その年齢も明らかにしてゐる。元祿七年版の「彼岸櫻」にも同様。(もつともこの「彼岸櫻」の内容は「西鶴置土産」のそれと殆んど同一である。)けれど、なほ片岡良一氏のやうに、これを疑ふ人もある。その著「井原西鶴」に、

元祿六年に五十二歳を以て歿したといふ所から逆算しての寛永十九年生れといふのも、亦大體首肯出来る所であるけれども、彼が菩提寺誓願寺の過去帳にはその歿年を五十三歳とあるといふから、恐らく夫を記録の誤りであらうと思ふにした所でなほ幾分の疑ひは残る。同時代者近松に

辭世として傳へられてゐる歌が二首あることなどによつて正しく知られる通り、當時の人々の辭世が必ずしも死に最も近い時の作といふのではなく、かなり前から用意されてゐたものらしいことなどが、「浮世の月見過しにけり末二年」の句をも、そのまゝ彼の歿年を語るものと信ずるには、幾分の躊躇を感じさせないものである。まして彼の著「男色大鑑」に、見聞覺知の四の二の年まで諸國に尋ねて得た材料を書綴るといふ意味の言葉があつたのを、單に「大鑑」のみならず、彼の浮世草子全般に通ずる言葉ではなかつたかと思へば、彼の處女作「一代男」の世に出た天和二年が、四十二歳の時になり、従つて益々誓願寺の過去張を無視し得ないことになつて來る。

とある。しかし、これはいささか思ひ過しではあるまいか。なるほど彼の歿年を誓願寺の過去張通り五十三歳だとすれば、處女作「一代男」の出た年が四十二歳だといふことになり、見聞覺知の四の二の年まで云々の記述は生きて來るわけだが、しかし、果してこの見聞覺知云々は全く信をおいて良いものかどうか。

そのまま信すれば、彼は四十二歳まで諸國を放浪して、そして四十二歳にはじめて一定の場所に落ち着いて浮世草子の筆を取つたと想像されることになるわけだがしかし、げんに「難波雀」には

西鶴が延寶八年に大阪館屋町に住んでゐたといふ記述がある。延寶八年とは西鶴の三十八歳の時だ。また、彼が浮世草子を執筆するその時までずっと放浪生活を送つてゐたとすれば、浮世草子を書く前の俳諧生活、なかんづく大阪生玉の大矢數興行などどう考へてよいか分らなくなつて来るではないか。もつとも、片岡氏も「諸國に尋ねて」をそのまま放浪と釋つてをられるわけではなく、單に序文的な言葉の綾と考へて、そしてこの序文的な綾に、四の二の年までといふ言葉を結びつけて、これを以て浮世草子執筆の年を西鶴が自ら諷したものだ、と、解してをられるのであらう。しかし、私はこの四の二の年といふ數字に西鶴自身の個人的年齢をどこまで正確に現してゐるか、といふ點に疑ひを持つ。四の二とは語呂の良さから來た數字だと私は獨斷したいのだ。

いつたいに西鶴は數字の好きな作家である。既にして辭世にも數字が出て来るし、佳吉の社頭に一日二萬三千五百句の大矢數興行をものして、二萬翁乃至二萬堂と自稱してやに下つてゐたことにも、彼の並々ならぬ數字好みがかがはれる。なほ、著作の題名にも數字を冠したのが多く、この數字好みに、私は西鶴の大阪人を感じ、リアリストとしての性格を見、かつ、その技巧をうかがふのである。大阪人はすべて勘定が細く、計算が好きだ、といつてしまへばそれまでだが、事情はそこから出發して擴がるのだ。すなはち西鶴は、まづ彼の藝術を計算する。彼の文章の効果を秤にのせ

る。そして、數字は何ものをも容赦せぬ冷酷な現實であり、曖昧や感傷をもたぬ生々しい象徴であり、しかも、そのためにリアリズムの果てのユーモア的效果を生むことを、心得てゐたのである。當然、彼の作品の隨所に數字が出て来る。

例へば「日本永代藏」卷三の「煎じやう常とはかはる問藥」がそれだ。

四百四病は世に名醫ありて驗氣をえたることかならずなり。人は智慧才覺にもよらず貧病のくるしみ、是をなほせる療治のありやと、家有徳とくなるかたに尋ねければ、今迄それをしらず、養生ざかりを四十の陰まで、うかうか暮されし事よ、少し見立みだておそけれ共、いまだよい所あるは、革足袋に雪踏せうたを常住はか帶るゝ心からは、分限にもなり給はん、長者丸といへる妙藥の方組傳へ申べし。△朝起五兩△家職二十兩△夜詰八兩△始末十兩△達者七兩、此五十兩を細かにして胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入、是を朝夕吞込からは、長者にならざるといふ事なし。

この「日本永代藏」は副題が「大福新長者教」となつてゐるのを見てもわかるやうに、寛永四年の「長者教」(作者不詳)の向ふを張つて書いたものだけに、いはば町人訓ともいふべき教訓的意圖の多い作品だが、この一節はなかんづくその句が濃く、朝起五兩以下の長者丸の處方箋などその代表的なものである。ところで、「長者教」にもこれと同様の一節があり、福の神十人御子として、

貯へ太郎たねもち、朝おき次郎むねきよ、算用三郎かねます、内ゐの四郎家吉、五しやう五郎なをます、會釋六郎爲吉、有合七郎家康、斟酌八郎末吉、物こらへ九郎重吉、心たて十郎末高。が擧げてあり、こゝにも三郎、四郎などと數字が出て來るが、西鶴はそれに一步進めて、たとへば朝起次郎の代りに、いきなり朝起五兩とやる。また、同じ「日本永代藏」卷一の「初午は乗つて來る仕合」には、水間寺の觀音で錢一貫を借りた男が、その錢を掛硯の中に入れて置き、

獵師の出船に子細を語りて百文づゝかしけるに、かりし人自然の福ありけると遠浦に聞傳へて、せんぐりに毎年集りて一年一倍の算用につもり、十三年目になりて元一貫のぜに八千百九十二貫にかさみ、

と、あるが、この數字はさすがに數學的に正しい。西鶴は御苦勞にも等比級數のむづかしい計算をしてゐるのである。餘程の數字好きでなければ、やれないことだ。

しかるに、第二章の「二代目に破る扇の風」を見ると、こんな個處がある。

此をとこ一<sup>い</sup>生のうち草履の鼻緒を踏きらず、釘のかしらに袖をかけて破らず、萬に氣をつけて、其身一代に二千貫目しこためて、行年八十八歳、世の人あやかり物とて升搔<sup>あすかき</sup>をきらせける。さればかぎり有命、此親仁其年の時雨ふる比、憂の雲立ちどころをまたず、頓死の枕に残る男子一人して、

此跡を丸どりにして廿一歳より生れ付たる長者なり、此世<sup>せがれ</sup>悴親にまざりて始末を第一にして、あまたの親類に所務わけとて箸<sup>し</sup>かたし、散らさず、七日の仕揚、八日目より部門口を開けて世をわたる業を大事にかけて、腹のへるをかなしみて、火事の見舞にもはやくは歩まず、しはいせんさくに年くれて、明くれば去年<sup>こぞ</sup>のけふぞ親仁の祥月とて旦那寺に参りて、下向になほむかしをおもひ出して泪は袖にあまれる、此手袖の基盤綺は命知らずとて親仁の着られしが、おもへば惜しき命、今廿二年生給へば長百なり、若死あそばして大ぶん損かなと、是にまで慾先立て歸るに。(傍點織田)

仔細に見れば實に數字が多い。ところが、あれほど用意周到な西鶴がここでは、八十八歳の親仁が「今廿二年生給へば長百なり」と、——長百は丁百で滿百の事。錢勘定で九十六文を百文とする習慣が當時あつたがここではまるまるの百文といふ意——簡単に計算のまちがひをやつてゐる。無論、廿二年は十二年でなくてはならないのだ。

かういふ間違は例へば「一代男」にもある。即ち、卷一には「五十四までたはぶれし」云々としておきながら、卷八の世之介の年齢は六十歳になつてゐる。何といふ無頓着さか、づばらさか、出鱈目か。

不注意といつてしまへば、簡単だが、しかしかういふ誤りを平氣でやれるところに私は何かしら

彼の不逞々しい性格を感じるのである。單に俳諧的だといふ以上のものがあるではないか。そして、さういふ西鶴であつてみれば、どうやら見聞覺知の四の二まで云々の數字は、良い加減なものではなかつたか、と思はれるのである。少くともこれがそのまま彼の正直な履歴書だとは、思へないのである。彼は所謂謹直、小心な私小説家ではなかつたし、よしんば私小説家であつたとしても、平氣で嘘の書ける男であつた。

嘉村磯多氏をいきなりここへ出すのは如何なものかと思はれるが、例へば嘉村氏のやうな謹直、峻嚴、純粹な私小説家の、いはば自己の業をさらけ出した作品の中にも、随分事實と違つた嘘が語られてゐたといふ。してみれば、西鶴が嘘だらけの私小説を書くことを想像するなど、至極簡単である。誤解されると困るが、要するに作家とは嘘をつく才能をもつた人間の稱ひである。もつともこの嘘つきには、嘘をつく快感の外に、眞實を愛するといふ強い本能がある。スタンダールなど一生嘘をつき通した作家だが、またスタンダールほど眞實を語つた作家は、さう澤山はない筈だ。西鶴はスタンダールほどの嘘つきではなかつたが、ともあれ嘘は平氣でつけた方である。少くとも實の境で藝の獨樂をまはした作家だ。實に偏すれば、藝の獨樂は倒れるものだ。だからといつて、しかし、私は彼の作品に現はれた私小説的要素を、全部否定する氣はない。今更いふまでもないが

生活の影が全く作品に投じないほど、おのれを捨て切るとはどんな作家にも出来ない相談だ。出来ると思ふのは、單なる小説理論の夢に過ぎない。西鶴の作品にもむろん彼の生活は投影してゐる。(このことに就ては後章で述べる。)しかし、それと、見聞覺知四の二年云々の傳記的要素とは、いくらか話は別だ。その時、四十二歳だつたから、四十二歳だと書かなければ、承知できないやうな、そんな西鶴であらうか。さうまで自己の經歷の織込みに忠實にならなくとも、もつとほかの場所では忠實になれる西鶴である。話が飛ぶが、大正二年に貿易會社に勤めてゐたから、大正二年の貿易會社の内部からまづ書かうなどといふ氣持は、作家としては了見が狭い。

ともあれ西鶴は四の二年の私小説的正確さよりも、語呂の良さの方を尊んだのであらうと、私は獨斷したい。確信したい。この數字は、墓碑銘の彫刻文字を消すほど強くはないのである。坊主の書いた過去張も、門人の筆ほど當てにはなるまい。してみると、西鶴が元祿六年八月十日、五十歳で死んだことだけは、まづ疑ひの無いところであらう。そこから逆算して、寛永十九年壬午に生れたことが明らかにになる。生れた月日は明らかでない。どこで生れたか。無論大阪である。西鶴と親交あつた榎本其角の「句兄弟」に「西鶴は難波に生れ」云々とあり、西鶴十三回忌追善句集の「心葉」の序に、門人北條國水が「近比井原西鶴トイフ者アリ、攝津ノ浪華ノ産ナリ」と記してを

り、また西鶴自身その著「俳諧團袋」に故郷難波といふ言葉を使つてゐるし、彼の祖父西譽道方が彼の二十四歳の五月十二日に大阪で死んだといふから、まづ彼が大阪に生れたことは動かせぬところだが、木崎愛吉氏などは、

西鶴は何處に生れたのであるか。大阪の土著か、但し他郷の流れ人か。「西鶴法師も此の浦に足をとどめて」と「傳授車」の序に言つてあるのが、何だか氣がよりでならない。わたくしは何時も夢のやうに「但馬の國鑛堀る里の邊」といふ一代男の詞が氣になりて、若しかすると生野あたりの出身ではなかつたらうかとも、現に迷はされる事、獨り可笑しくおもふ。

云々と「西鶴研究」のなかで、疑つてをられる。

なるほど「傳授車」の「此の浦に足をとどめて」から察すれば、西鶴は他國から大阪へ流れて來た人に見えるが、しかし私は足をとどめて云々はなんだか言葉の綾のやうに思へてならない。法師から導きだした言葉のやうだし、また西鶴に放浪時代があつたことから來た「足をとどめて」かも知れない。もうひとつの「但馬の國鑛堀る里の邊」の一代男の詞も、私はそこから西鶴の生野出身が出て來るとは、思へない。いつたいに「一代男」は西鶴の自傳的要素が強いと言はれてゐるのだが、しかし、さきにも述べたやうに、西鶴は噓のつける作家である。自らミラノの人と偽稱したス

タンダールほどではなかつたにしろ、但馬の國に生れたから、作中主人公の世之介も是非さうしななければいけないといふほど、律義な、小心正直な作家ではなかつた。「一代男」の冒頭はかうだ。

櫻もちるに歎き、月はかぎりありて、入佐山、爰に但馬の國、かねほる里の邊に、浮世の事を外になして、色道ふたつに、寝ても覺めても、夢介と、かえ名よばれて、名古や三左加賀の八なとと、七ツ紋のひしにくみして、身は酒にひたし、一條通り、夜更けて戻り橋、或時は若衆出立、姿をかえて、黒染の長袖、又は、たて髪かつら、化物が通るとは、誠に是ぞかし。それも彦七が統かみして、願はくば咀かみころされてもと通へば、なを見捨て難くて、其比名高き中にも、かづらき、かほる、三夕、思ひ／＼に身請して、嵯峨ひづこみに引込或は、東山の片陰、又は藤の森、ひそかにすみなして、契りかさなりて、此うちの腹より、むまれて世之介と名によぶ、あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし。

西鶴があくまで自分の履歷を織込むのに未練があるとすれば、「此うちの腹よりむまれて世之介と名によぶ。あらはに書きしるす迄もなし、しる人はしるぞかし」などと、曖昧に言ひ放つては置かなかつたであらう。折角「かづらき、かほる、三夕」の名を出したのだから、どの腹からと、一筆あつた筈である。即ち、むやみやたらに履歷を織込むのに未練が無かつた證據ではあるまいか。